

# 朱吾弼小論——朱熹末裔の出版活動の背景——

白井 順

## 1、はじめに

万曆三十二年（一六〇四年）、朱熹の古里婺源の十三世裔孫・朱崇沐は、朱吾弼とともに『朱子語類』を皮切りに、『朱子録要』『朱子奏議』『朱子全集』『朱子年譜』『近思録』『小学』『朱子学的』『韓文考異』『朱子家礼』『楚辭集注』『經濟文衡』『資治通鑑綱目』を次々と出版した。『朱子語類』の版本に関しては多くの研究があるが、朱吾弼の版本に関しては胡適・錢穆らの研究にも言及されていないし、『朱子全書』でも成化本の翻刻本とするのみである<sup>1</sup>。岡田武彦氏が朝鮮古写徽州本朱子語類の成立と流伝に関連して、朱吾弼の万曆本がそれに関わることを指摘した<sup>2</sup>。近年では石立善氏が徽州本巻一一八（訓門人六）～一二二（訓門人九）が万曆三十二年朱吾弼刻本による補鈔本であると指摘しており、徐時儀氏も朱吾弼ら万曆刊本関係者の名前が一致すると述べる<sup>4</sup>。また万曆三十二年に朱吾弼が重輯した『朱子語類』は、本邦で訓点を付して刊行された唯一のもので、日本における『朱子語類』の受容を考えるとき、東アジアにおける朱吾弼重輯本『朱子語類』の重要性が容易に理解できる。しかしながら、岡田武彦氏が朱吾弼本『朱子語類』について京大本（万曆三十一年序刊）と内閣文庫本（万曆三十四年序刊）の二種を指摘する以外に、朱吾弼その人および刊行の背景に関しては研究がほとんどない。

『中国古籍善本書目』によれば、朱吾弼『朱子語類』は中国科学院・人民教育出版社・江西大学図書館・中山大學図書館・上海図書館・浙江省図書館が所蔵する。徐時儀氏は上海図書館本は初刻で、浙江省図書館本は崇禎六年の補修本であるという。岡田氏は万曆本として京大本（万曆三十二年序刊）・内閣本（万曆三十四年序刊後刷）と更に崇禎六年陸錫明補修本を紹介するが、その詳細については記していないので幾つかの問題点を指摘したい。また朱吾弼は『朱子語類』と同時に『朱子文集』なども出版したが、これらの出版についても先行研究はない。これらの刊行活動の全体像を明らかにし、検証するのが本論の目的である。

結論から先にいえば、朱吾弼は李材に従学し、江西の鄒元標の講学活動に共感していた人物である。朱吾弼が朱熹『朱子語類』を出版したのは、強い同宗意識を背景としていた。朱吾弼は高安（現・江西瑞州）の杜山朱氏の人であるが、朱熹が記したと言われる「茶院朱氏世譜後序」を深く信じ、婺源朱氏十三世朱崇沐とともに一族総出で出版作業を始めた。朱吾弼・朱崇沐が出版した朱子学文献の編纂には、当時の講学に対する考え方が非常に大きな影響を与えている。このことは、『朱子語類』や『朱子文集』の流布について比較的大きな問題だと思われるが未だ指摘がないので、以下にその論証を行いたい。

## 2、朱吾弼について

朱吾弼、字は諧卿、号は密所（後に密林に改める）、高安の人である。『明史』および『東林同志録』『東林貫籍』『盜柄東林影』にも名前が見える。<sup>8</sup> 朱吾弼と姻戚関係にある鄒維璉（一五八六―一六三五、字は德輝、号は映垣、匪石）は彼の伝を記しており、次のようにある。

自幼穎敏、年五歲、聞外祖黃梅臯歌、箇箇人心有仲尼句、恍然大悟、攻苦讀書、期為聖賢。嘗疏大學誠意章於座側曰、勿欺二字做人本子。既舉於鄉、從李公見羅講學。万曆己丑成進士。初授寧國推官、一介自矢、不可干以私。每遇大獄、終夜不寐、焚香平反、得情乃止。時論俱以銓司擬。後選南臺、人為不平、公曰、我自幼願作天下第一等人、未嘗願作天下第一等官。…万曆戊申、起南光祿遷大理丞時、揆地惟福清葉公一人。…天啓元年、起公大理少卿、尋轉南京太僕。…公性剛直、有南台權貴斂手、稱為鉄面。政暇則与諸名公表章朱子之學、而捐俸建書院於星源、以造後進。林居讀書、吟詩不輟。而立家約化鄉族、尤篤友誼。嘗受家宰見籠蔡公之知、撫其二孫襁褓中如己子。忌者不能害、蔡公不絕如綫、以公為之死友也。…勿欺二字、易箠猶以訓諸孫。所著有密林漫稿、奏疏數卷行世、祀鄉賢。

鄒維璉は右の伝と祭文<sup>10</sup>を記すだけでなく、引文中にある朱吾弼の文集『密林漫稿』では序も記している。『密林漫稿』は孫の朱恒敬が天啓二年に刻したもので、現在天津図書館が所蔵し、『天津図書館孤本秘籍叢書』に収録されている。朱吾弼は嘉靖三十三年（一五五四年）頃に生まれ、右の引用にも言うように幼少期には鄒守益の門人である外祖黃梅臯の教えを受け、李見羅（李材、一五二九～一六〇七）に学んだ。「外祖」とは黃孝靖（梅臯）のことで、朱吾弼は外祖の墓誌銘を記し「弼憶纔四齡、先生每龍溪・鳧沙三公危坐談学、弼嘗前膝傾聽、喜孺子可教、教之歌詩学古人<sup>11</sup>」と薰陶を受けていたことを記す。朱吾弼は晩年自らの学問について以下のように言う。

不佞自童稚知句読、先外祖講学為鄒東廓先生門人、教以良知。久習薛文清公語録、謂知一字行一字、知一句行一句、益信知行合一乃真聖賢、人之生、直罔生幸免：君子有朋、小人有党、恥為小人、安得有党、而尽尽抹殺君子之朋謂衰朽、非東林同志不可也。<sup>12</sup>

朱吾弼の祖父は覺齋と号し、嘉興県丞であった。父は継通（字は汝彦、号は松岡）で、生母は黃氏。朱吾弼は万

曆乙酉十三年（一五八五年）の挙人であり、万曆己丑十七年（一五八九年）に進士になった。この万曆十七年進士というのが非常に重要で、朱吾弼は共に講学活動をした高攀龍（一五六二年～一六二六年）・馮從吾（一五五六年～一六二七年）らと同年の進士である。彼らは同郷の同年進士であり生涯の友でもあった、劉曰寧（字は幼安、？～一六一二年）と陳邦瞻<sup>13</sup>（字は匡左、一五五七年～一六二三年）もそうである。また趙南星・顧憲成とともに東林党の三君と称される鄒元標（一五五一～一六二四、江西・吉水出身）とは、ほぼ同年齢で出身地も近く、若い頃から交友している<sup>14</sup>。朱吾弼が顧憲成に与えた書簡には「不佞自癸巳春、聆台教于長安、傾蓋平生之感<sup>15</sup>」とあり、癸巳すなわち万曆二十一年（一五九三年）春に顧憲成と面識を得て、同年に福建道御史に擢せられ、同二十三年に南京浙江道御史に官せられた。万曆二十八年（一六〇〇年）、朱吾弼は余孟麟（一五三七年～一六二〇年）の『余学士集』<sup>16</sup>の序文を記しているが、その序「余学士先生集序」には「賜進士第南京福建道監察御史門人朱吾弼」とあり、朱吾弼が受験した際に江西郷試を司っていたのが余孟麟である。朱吾弼の『密林漫稿』巻六「大司成余座師幼峰先生像贊」には「吾弼外李畿輔内召留台、事先生最久、知先生最深、九原莫作、仰瞻遺像、不能不愀然悲肅然敬也」という。この頃、前引の朱吾弼伝に「捐俸建書院於星源」とあったように、婺源に学校を建て、汪国楠に託して後進の育成を始めた。朱吾弼は朱崇沐（朱汝潔）の祭文を書いて次のようにいう<sup>17</sup>。

余昔慨悠悠世道壞於人心、人心壞於學術、學術壞於詭正崇邪。商之二三同志、表章文公為挽回計、而難其任。汝潔夙志思酬、遂鬻產出肩之、不数月朱子語類煥然成帙矣。汝潔置身家度外、全副精神以文公道明為己責。不数年、則全集・家礼・小学・年譜・学的・近思錄・文衡・錄要諸書、未幾充棟、復謀構藏書樓、一新闕里。文公賢裔困諸生中如汝潔者、能再屈指哉。文公諸刻、將布滿寓内、故誦其書崇其教者、如日月食後大明中天。汝潔真新都偉人、儒門傑士矣。余將從史汝潔、進之御覽、藏之国学、胡天不愆遺令汝潔弗須臾待也。汝潔妻寡子

幼、恒産大不足食、敝廬僅蔽風雨、猶以屋地書板推。侄邦柱與二孤邦藻・邦榮鼎分、寄我遺言、惓惓以文公遺書為托。星源道学之邦、念文公必念遺書、念遺書必念汝潔。而保護二孤玉之于成、况邦柱感恩罔報、見寡孀孤弟、当如見叔父、定見汝潔存日改心易慮。汪君斗崙、王君正巳皆古君子。余為汝潔轉属之、撫若予姪修明文公之業、二君必不負余、汝潔可以瞑目矣。

『婺源県志』卷二十一義行には朱崇沐の伝があり、誕生に際して朱熹が夢枕に立った話を載せる。<sup>18</sup>朱崇沐は先祖の著作の出版が悲願で、最初に『朱子語類』を出版し、その後数年かけて諸著作を出版した。汪国楠（汪斗崙、婺源の人）・王正巳（王用修）は実際に『朱子語類』などの校閲にあたった人物である。朱崇沐は朱吾弼に遺言を寄せて、朱邦柱（字は茂卿、婺源の人）および自分の息子朱邦藻・朱邦榮を託した。

朱吾弼は朱熹が記したとされる所謂「婺源茶院朱氏世譜後序」<sup>21</sup>の影響を受けている。朱熹は婺源茶院氏宗族の九世孫に当たり、福建で生まれたが二度婺源に帰省して墓参りをし、淳熙十年（一一八三年）に『婺源茶院朱氏世譜』を編纂した。<sup>22</sup>ト永堅氏の研究によれば、現在伝わる『婺源闕里朱氏宗譜』の第一次編纂は万暦年間で、婺源茶院朱熹から数えて九世孫の朱隱（婺源祠事を掌る）は、建安の朱樞と婺源・建安を合わせ、『婺源茶院朱氏譜』を重修した。嘉靖二年、婺源の朱墅（朱熹十一世孫）が翰林院博士を世襲して朱熹を祀ることを掌り、嘉靖三十五年に朱鏞（朱熹十二世孫）が継ぎ、万暦二十四年に朱徳洪（朱熹十三世孫）が世襲し、崇禎元年に朱邦相（朱熹十四世孫）が世襲した。朱崇沐はその闕里派の一派である。

朱吾弼は万暦十二年（一五八四年）に元の至正戊子（一三四八年）から、自分の家系の豊城・穆湖・燕山の三派が力を合わせて修譜してから今に至るまでの調査をし、婺源の茶院朱氏に繋がるものと考えた。<sup>24</sup>朱吾弼は朱熹裔孫の系統のうち、穆湖に移った夢仙、豊城に移った夢龍、瑞州府高安に移った夢炎三兄弟の系統で、明初の朱善（朱

一齋)の時に豊城に移り住んだ裔孫である。葉向高に「朱氏小宗譜序」を書いてもらい、万曆三十三年に朱吾弼は「社山朱氏東里齋小宗引」<sup>26</sup>を作った。更に朱吾弼は族譜を改修して郭正域(一五五四年〜一六一二年)に序文を書いてもらっている。朱吾弼は「高安社山朱氏世考」(『密林漫稿』巻六)を記し、更に万曆三十八年冬〜同三十九年(「一六一一年」)夏に朱吾弼は族譜の製作をして「辛亥譜成紀事」を記しているが、そこにも「文公茶院朱氏譜序」を引いている。

「社山朱氏祀堂記」<sup>28</sup>によれば、朱吾弼は万曆七年(一五七九年)に崇本堂という祠堂を建て墳墓を整理し、同十年(一五八二年)には社山朱氏では学校(官庁)を設けた。万曆三十三年には南台から故郷に戻り祠堂を建設した。その後、姚近渠の娘と結婚し、鄒氏の娘を妾とし三人の息子に恵まれた。次男は幼くして痘で亡くなり、三男・朱家紀(字は元礼、号は密欄、一五七八〜一六一一年)は『朱子語類』の出版にも関わっているが、万曆三十九年十一月二十九日に三十四歳で朱恒敬・朱惺敬を遺して痘病で死去した。<sup>29</sup>

朱吾弼『朱子語類』「重校語類姓氏」によれば、重校参加者は婺源朱氏(朱良材・朱德淇・朱德淳・朱邦棟・朱邦柱・朱邦相・朱邦校・朱成熙・朱成謙)、休寧朱氏(朱家用・朱家聘・朱家祥・朱家輔・朱家祚・朱之禎・朱之儒・朱之綸・朱之綬・朱士泰・朱之鳳)、高安朱氏(朱吾楫・朱吾翰・朱吾瞻・朱吾寵・朱家柱・朱家緝・朱家紀)、新淦朱氏(朱家林・朱祚隆・朱禧隆・朱銘陽・朱鍾陽)、それに婺源大畷汪氏(汪世徳・汪胤忠・汪胤燭・汪胤昌・汪胤燮)らであることから、朱崇沐と朱吾弼は同宗という強い連帯意識のもとで重輯を行ったことが窺える。また、この参加者については後述するが、万曆三十二年本と万曆三十四年本と比較すると異なるだけでなく、『韓文考異』(朱文公校昌黎先生文集)校閲参加者と重複している(附録【対照表B】を参照)。校閲者について言えば、例えば朱家林の肩書は万曆三十二年『朱子語類』では婺源の教諭であるが、『韓文考異』では松江府通判になって

いるなどの違いがみられる。同様に汪国楠の肩書も礼部儀制司郎中と変わっている（附録【対照表C】を参照）。

朱吾弼は、万曆三十年に歐陽東鳳（歐陽千仞）の手によって龍城書院が先賢祠として復活したことに刺激を受けた。常州の龍城書院は張居正による書院弾圧の発端となったところで、書院という名を避けて先賢祠として郷土の先賢を祀った。この先賢祠は傍らに經正堂と伝是堂という二つの教室が置かれ、そこで講学が行われた。『密林漫稿』卷六「伝是堂説」には次のようにある。

余壬寅夏、以汎防有海上之役巡歴昆陵。時守為歐陽子千仞。下車纔數月、治首教化、正復書院、議祠理學諸先詰津津。余曰、如千仞所以議祠者、重人与学合兢兢慎也。得無以千聖道統之伝在是以興起斯文為己任乎。於世道挽回何有。韓子曰、堯以是伝之舜、舜以是伝之禹、禹以是伝之湯、湯以是伝之文武周公孔子、孔子伝之孟軻。茲堂也、顔曰、伝是、可乎。千仞然而咨之陳子明・薛以身・高雲従・呉之矩・某某某輩、僉曰然。

この「伝是」とは、韓愈の『原道』の「堯是を以て之を舜に伝う」から採っている。伝是堂については小野和子氏も指摘しているが、この書院では学問が講じられただけでなく、農業・水利・人材・賦役など地方行政全般に関わることがテーマとなっていた。引用文の東林の八君子といわれた薛以身（薛敷教<sup>31</sup>）と高雲従（高攀龍）は共に万曆十七年同年進士で、彼らとともに朱吾弼は講学活動を始めたことが分かる。この伝是堂に関しては吉水の曾同亨が「伝是堂記」<sup>32</sup>を記しており、そこにも朱吾弼が大きく関わっていたことが記されている。

万曆三十一年末に『統憂危竝議』という怪文書が出された妖書事件に関して、沈一貫（四明の）が錢夢臯に告発させて郭正域・沈鯉を妖書作成の犯人に仕立て上げようとした際には、朱吾弼は上疏して郭正域を擁護した<sup>33</sup>。また、南京太僕寺卿のとき朱吾弼は同僚の李雲鵠、蕭如松・孫居相らと共に、正徳から万曆までの南京御史の奏疏を収録した『留台奏議』を編集している。この書は、君道・修省・好尚・儲貳・宗藩・厘正・臣職・国紀・時政・用人・

援直・民隱・財儲・礦稅・兵防・漕河・爵諡・拳効・近幸・權奸など二十門に分けられている。また、当時問題となっていた鉞税に関しても士大夫としての責任感を強く示す税制のあり方を上奏している。更に、乙巳の京察（万曆三十三年）といわれる事件では、朱吾弼は陳嘉訓・蕭如松・徐申・龐時雍とともに沈一貫と錢夢皐を弾劾した<sup>34</sup>。この時、朱賡（山陰の人）が朱吾弼を救い、朱吾弼は病を理由に退いた。このように朱吾弼は政治的に危険な状況の下で、婺源朱氏の出版活動に関わっていたのである。

小野和子氏は婺源の紫陽書院の活動について、「事情は明らかではないが、おそらく一時期閉鎖されていて三賢祠としてあったものを、万曆四三年に馮時來が再建した<sup>35</sup>」と述べている。しかし、馮時來以前にすでに朱吾弼らが活動していたことが『密林漫稿』から裏付けられる。朱崇沐没後、万曆四十一年に馮時來が婺源知県に赴任し、朱吾弼は朱崇沐の息子朱邦藻・汪国楠・呉養春（呉百昌）の働きを紹介するなど馮時來の婺源講学を顕彰した。「答馮婺源」には次のようにある。

敝門人汪斗崙鼓舞豪傑、重新闕里、竭其心力。捐貲倡始、即呉百昌諸公多助、皆尊信斗崙、而因尊信文公、成此百代不磨之業、以待大賢、倡明正学、化新都為鄒魯、功甚偉也。其子胤昌、亦津津繩其父武、今相繼作。古人且無孫、而伯季之孫繼之。…朱生邦藻母子、必令聯其兄邦柱同甘苦無相怨、一方羞文公裔崇沐此在。汪登翁・余少翁・余瑤翁及渠家博士公公議詳妥、主張于上、必假仁台鼎重、其為綱目。借用者今止償其母、俟諸刻盛行有余、然後及其子。

この時すでに、汪国楠（汪斗崙）は世を去り、息子の汪胤昌が後を継いでいた。天啓年間に婺源紫陽書院を盛り立て徽州講学を牽引した汪登翁（汪応蛟）・余少翁（余懋衡）・余瑤翁（余瑤圃）・渠家博士（朱徳洪）が主となり、朱氏一族の活動から婺源地域の講学へと変化していることが見て取れる。天啓年間の婺源紫陽学会に参加していた



潘之祥は「時与同邑少原余公、登原汪公講明正学日進、諸子弟課文芸、置田三十畝為館穀資、名曰興賢文会<sup>38</sup>」  
と云っており、学校を備えるようになっていた。朱吾弼はまた、万曆四十年ごろ給事中の職にあつた余瑤圃に今後の婺源の活動を託して次のように言う。

且以紫陽学会、召之主盟、以非常寵加尋常人、感激皇恐、莫知形容：蓋独子痘亡、幾於喪明、已決首丘、昨誤迫于敵同年劉幼安強出。今但頼藥物苟活、哭汪斗崙父子、謁文公闕里、遊上国承諸公之教、一息尚存此、志未懈。第恐一朝寧方倚正人、吾弼於台臺之道縁、似未前結念之悵惋。東林高景逸、尤涇陽先生後一人、今表章文公、彼之美功、首扶持善、類於台与、有厚望焉。<sup>39</sup>

当時の出版活動の主体である朱崇沐・汪国楠が去つただけではなく、朱吾弼は息子の朱家紀を亡くし、同郷の親友である劉曰寧（劉幼安）も亡くしていた。東林書院の顧涇陽（憲成）も万曆四十年に亡くなり、残っていたのは高攀龍ただ一人だった。高攀龍の年譜の四十一年九月の条に「擬赴新安吳百昌中翰講学之約<sup>40</sup>」とあり、「吳百昌中翰」とは呉養春のことである。また万曆四十三年に高攀龍は『程朱闕里志』の序文も記した。朱吾弼・朱崇沐が出版活動を始めた当初は、高攀龍・陳邦瞻（陳匡左）<sup>41</sup>・汪国楠・呉養春らが参加し、茶院朱氏の末裔として朱熹の英霊に捧げる私的な活動であつた。それから重梓した書籍を婺源の国学に頒布するようになって、少しずつ状況が変化していった。朱吾弼は「祭文公朱夫子文」<sup>42</sup>の中で以下のように言う。

吾弼随同志士高攀龍・陳邦瞻・汪国楠表彰夫子遺書、廻瀾砥柱於滔滔之濱。幸夫子裔孫朱崇沐力肩其任、割産勞神、書幾充棟、十年苦心。且也藏書建樓、勅賜闕里、巍然一新。戊申冬、抱病顧我於社山之陰、抵掌劇譚、將俟呉養春昆季綱目竣工、以夫子重梓諸書、進之聖明、頒之国学、達之天下、令斯世斯道昃然重明。何天不慙遺崇沐不少緩須臾之頃。崇沐修短有命、抑其孱稟疾軀、即幸梓諸書、皆倚夫子在天之靈。吾弼偶承乏千秋入賀

之役、紆道拜夫子於廟庭、兼視崇沐二孤。今崇沐侍夫子於夜台、必同啓翼二孤於冥冥、吾夫子正學之宗、凡有志正學者宗之、矧邇源於茶院公。又二本之親、陳辭告奠、仰止情殷。尚饗。

〔戊申冬〕すなわち万曆二十六年（一六〇八年）朱崇沐が病を押して朱吾弼のところに尋ねてきたとあり、「十年苦心」とあるから万曆二十六年頃から朱崇沐は活動を始めたことが分かる。「夜台」とあるから、朱崇沐はこの文章が書かれた際には既に亡くなっている。朱吾弼は出版活動に関して、たまたま人材がいなかったもので、このような大役を仰せつかったと述べ、出版活動の最後は『資治通鑑綱目』で締め括った。葉向高はその『資治通鑑綱目』の序文を書いており、そこには「蘇守朱君重刻通鑑綱目、而請余爲之序。予謂朱君茲萃、足爲考亭功臣、故不辭而弁其端。夫朱君寧功考亭功世道矣。」<sup>13</sup>という。このほか葉向高は、朱吾弼・朱崇沐が重輯した『朱子語類』『朱子奏議』にも序文を寄せており、彼らの重輯活動に深くかわった人物であると言える。朱汝潔が作った蔵書樓については『婺源縣志』卷十二の曹于汴「蔵書樓記」<sup>44</sup>の中にも見え、万曆三十二年徽州府知府梁應沢の「朱子語類序」には「侍御高安朱公道統己任、得語類百四十卷、嘉興後學授蔡裔朱生崇沐及朱論家林以梓。不佞新安兮靈不滅、龜蒙朱子羽儀、追踪孔孟、茲刻成而建樓藏之」とあり、山東の龜山・蒙山を連続して呼ぶごとく、一連の活動を象徴するできごとであった。『密林漫稿』卷九「答婺源紫陽會諸友」には次のように言う。

婺源闕里紫陽佳會、大振文公之教。凡有志願學者靡不開風、而況吾弼於文公爲同宗後學、重以諸名公召命、汪元震・胡元一二君、不遠千里、冒暑賁廬。自当竭蹶請益、奈寔衰寔病、繳節乞休、万非獲已。祇令人悵道緣之薄、天若限之矣。吾弼生平寡學無聞、志有余、而力不足、守父兄之訓、操心行之衡、童習老信、惟覺講學者只一部四書尋繹透徹、便無遺道無遺學。文公集諸儒之大成、孔子集群聖之大成、此先哲定論、似更不必作見解添注脚。何但天竺柱下之說、無容攙入乎。新都德星聚里、高賢盛會、吾弼即幸側門牆之内、不能贊一詞。乃当年

私臆、世道壞於人心、人心壞於學術、學術壞於皆朱從禪、共高景逸・陳匡左・汪斗崙扼腕、為世道慮、非表章文公、空言無禪。喜文公賢裔朱生崇沐汝潔出而挫產肩任、吾儕力贊助之、重梓遺書、藏書建樓、欽賜之闕里頓新。邇來人心學術漸有挽回、而新都六邑則一心一學。斗崙弟子吳百昌養春、崇文有書院、日課月程、朋來輔仁者、居然一紫陽考亭也。惟末世醜偽學者、因醜講學、今日之講、喫緊以真學為己則真、學為君子儒則真、真之根、在勿自欺。∴鄒爾瞻先生仁文約有修悟證三字符、皆真學也、可以參考。迂愚井蛙、布其直諒、恃諸名公有以卒教之。可謂異地非同堂耶。

「偽學」というのは朱熹の当時、韓侂胄によって「偽學」という烙印を押されたことを踏まえる。三浦秀一氏が指摘するように、鄒元標（鄒爾瞻）は故郷吉水での講学「仁文会約序」において、悟（先悟）と修（重脩）そして証（貴証）を説いた。朱吾弼は鄒元標の講学を「真學」と褒めているから、朱学一尊の思想を持っていたわけでないことが分かる。呂妙芬氏が、江西講学の風格が家族を構成員とする家会と指摘しており、朱吾弼の活動も場所は婺源であつても宗族・家会と同類であると考えられる。また呂氏は「明代吉安府的陽明講会活動」で吉水の講学活動について分析しているが、朱吾弼は朱崇沐の息子朱邦藻に宛てた書簡（『密林漫稿』卷九「答朱邦藻」）には次のようにいう。

敝同年熊思城兄、学本先師李見羅先生止修、折衷群賢、尤宗文公、近以軫符卿在里約前月会講。不佞偶有先曾祖衆居建坊之役、独任勞費、不能出戸、新正必面神交、企仰隆情敬為門下。∴令叔恒初公祖正人正学、既執牛耳、門下宗信異類、終避舍修身為本。大学要訣与知而不修、寧修而不知、無忝太平世日用百姓耳。步趨朱子、凡諸儒所見、無一遽遺。愚謂儼孔子之集大成、以儒繼聖、原非偶然。吾輩法孔朱、須從此入、有異同輒、有毀譽直爭。

朱吾弼は万曆三十六年戊申に南京光祿寺少卿から大理寺右寺となり、同三十九年に病を理由に帰郷。天啓元年に大理寺少卿から南京太僕に転じた。この江西高安婦郷時に、朱吾弼は蔡見麓（蔡国珍、一五二八―一六一一）と講学していた。朱吾弼が書いた「蔡見麓墓表」には「許敬庵・楊復所・周海門諸公聚講、諸公每講輒摘訟朱子各註疏、自雄聽惑茫昧、退而罔得質之<sup>47</sup>」とある。万曆四十八年（一六二〇年）、熹宗が即位すると魏忠賢による弾圧が激しくなり、朱吾弼は削籍され、天啓五年（一六二五年）に七十一歳で亡くなった。

『朱子語類』の校閲者として記される呉養春は、泊如齋という齋号を持つ坊刻の名家である。当時有力な儒商で安徽古歙だけでなく、黄山の林業開発など手広く事業を展開していた。呉時俸・呉養春・呉養京・呉養都・呉繼志・呉希元らは、多額の献金をしたことによって中書舎人になった。<sup>48</sup>中でも呉養春はこの朱子遺書関連の出版資金を募る主導的役割を果たしており、自ら築いた崇文書院<sup>49</sup>で刻書や蔵書などの所謂「桑梓之士人」を養成していた。つまり呉養春は、自らの書室泊如齋としてではなく、朱吾弼の活動に参加していた。先に挙げた「答婺源紫陽会諸友」では汪国楠の弟子と言われており、朱崇沐の出版活動には当初より参画していた。『朱子語類』は、古歙の呉養春・呉養京・呉養都・呉養沢らが金を募って出版したもので、その次に彼らが出版したのが『朱子文集』である。呉養春兄弟が主となって義援金を募り、汪国楠を信頼して歙邑で校讎作業が進められ、万曆四十年代、馮時来が婺源知県となったころ、朱吾弼が呉養春に与えた書簡「答呉百昌中翰」には「初汪斗崙宜人遣持、余少老及汪登老諸公、分析閱書、係馮令公批印、付宜人者、情法両全、因惡柱叔侄各有盜売代遺書、馮令公、余少老、汪澄老、慳老必為主張。斗崙未有葬地、吾輩生死交情、安能忘之」とある。馮時来・汪登翁（汪応蛟）・余少翁（余懋衡）らの名があることから推測できるように、朱吾弼が出版したものは当時の婺源講学において重要な朱子文献だった。引文中に「盜売代遺書」とあるが、朱氏一家の物だったのに一族の者（高安の朱邦柱）が勝手に売ってしまったらしい。

朱吾弼が王正巳（王用修<sup>50</sup>）に与えた書簡には、最後に出版した『資治通鑑綱目』は蘇州で出版された秀麗なもので、「初以義拳、終以利迷（初めは義を以て挙げ、終には利を以て迷う）」という事態を引き起こしたことが記してある。

『明代版刻綜録』の朱吾弼・朱崇沐・呉勉学・呉養春の条には記載がないが、『徽州刻書』には万曆三十三年に呉勉学が朱崇沐と呉養春とともに『晦庵先生朱文公集』（『朱子大全書』）を校刻したとある。『徽商研究』には、呉勉学や呉養春ら塩商が『朱子大全』や医学書などを出版したことについて、夢で冥界の判官に「何か良いことをしたのか？」と聞かれ医学書を出版したと答えた寓話を引いている<sup>52</sup>。しかしながら、朱吾弼の『密林漫稿』を見る限り、呉養春兄弟にとつては朱子学文献の出版こそが儒商としての講学活動であった。万曆四十年前後、黄山の相続に関して呉養春の弟・呉養沢が訴訟を起こし、「黄山大案」に発展した。王興亮「明末徽州大獄与党争」<sup>53</sup>には、呉養春の財産相続に起因する私恨には魏忠賢の閹党が関係していて、閹党によって事実が捏造され疑心暗鬼になり、呉養春が翰林編修の呉孔嘉の父（呉養春の族兄弟）を殺すに至ったと指摘されている。結局、呉養春の黄山大獄事件では『朱子語類』『朱子文集』の再刊作業に携わった呉氏（呉養春親子ら八人）が獄に入れられてしまう。天啓六年（一六二六）に彼は、黄山大獄によって獄死することになるが、その詳細については『欽事閑譚』卷十三および『岩鎮志草』に記載がある。朱吾弼が呉養春に与えた書簡「答呉百昌中翰」<sup>54</sup>には、奸臣魏忠賢が呉養春の私財を狙ったことを暗に指して次のように言う。

不佞高臥山中、門設常局、髮白齒落、漸入衰景、已与世忘、惟林泉為適…今始易蕩蕩、独慎独修、只覺学問不得力、日苦勞擾、孤陋無聞、恨無縮地法、一崇文堂、共諸賢印証也。…有此阿郎、安羨阿堵黄山、既已経詳、不如省事為快。哀哉、汪仲木父子、今日殊可痛心。

天啓五年頃、朱吾弼は魏忠賢よつて政界を追われ、身に危険が及ぶのを避けて隠居していた。呉養春の崇文書院を

「崇文堂は共に諸賢の印証」と回想しており、「阿堵黄山（呉養春が継いだ財産）を羨む」という。黄山大獄記研究や徽商研究でもこの『密林漫稿』の記述は使われていないので、富豪呉養春の資料としては重要かもしれない。

### 3、『朱子語類』の刊行

次に、朱吾弼が重輯した『朱子語類』を見てみよう。京都大学文学部所蔵（中哲文：C11p\622、京大本と略称）朱吾弼『重録朱子語類』は第一冊目巻頭に万曆三十一年の葉向高・朱吾弼の序文を載せ、第二冊目巻頭に「重録朱子語類大全名列」と彭時「朱子語類大全序」、最終冊巻末に張元禎「朱子語類大全後序」と陳煒（三山）の文がある。重輯・校閲者・校訂者は、「宗後学監察御史高安朱吾弼重編・邑後学礼部郎中汪国楠・邑後学礼部主事江起鵬・宗後学婺源教諭新淦朱家楸同校・宗後学中書舍人休寧人朱家用・歙後学中書舍人呉養春・十三世孫翰林院博士朱德洪同閱・宗後学庠生高安朱家紀・十三世孫庠生朱崇沐校梓」である。第二冊目巻頭の「重録朱子語類大全名列」は、小宗ごとに歙後学・休寧後学・高安後学と一族の名前が並べられている。さらに、テーマごとに巻頭に校閲者を記しており、肩書の最初には必ず「宗後学」「邑後学」とあることから婺源の朱氏が作成したことがわかる。

次に和刻本を見たい。和刻本は「宗後学監察御史高安朱吾弼重編・邑後学礼部郎中汪国楠・邑後学礼部主事江起鵬・浙後学婺源知県嘉興譚昌言・宗後学婺源教諭新淦朱家楸同校・宗後学中書舍人休寧人朱家用・歙後学中書舍人呉養春・歙後学光祿寺署丞呉勉学・十三世孫翰林院博士朱德洪同閱・宗後学庠生高安朱家紀・十三世孫庠生朱崇沐校梓」とある。巻頭から彭時・葉向高・朱吾弼・汪応蛟の序と並び、最終巻末に陳煒（三山）の文と安井真祐の跋がある。和刻本『朱子語類』を京大本と比較すると、「浙後学婺源知県嘉興譚昌言」と「歙後学光祿寺署丞呉勉学」<sup>55</sup>

の名が加えられている。また校閲者を記した部分が巻頭にしかなく、京大本と書式が異なる。張元禎の後序もない。内閣文庫所蔵の朱吾弼『朱子語類』（林羅山・鷺峯手校手跋本）は、第一冊巻頭に葉向高・王図・楊宏科・曹楷・朱吾弼・譚昌言・汪応蛟・汪国楠・彭時・補刊朱子語類大全序（佚名）<sup>57</sup>という順序で序文が並べてある。最終巻の巻末には、成化癸巳の張元禎「刻朱子語類序」、万曆三十二年梁応沢「朱子語類序」、万曆三十四年朱一桂「重刻朱子語類序」がある。また岡田武彦氏はこの本を万曆三十四年後刷本であると紹介するが、朱一桂について言及がない。朱一桂は南昌（浮梁）の人で、嘗て婺源知県を勤めた人物である。朱一桂の序には「侍御朱公紫陽之宗也。紫陽之学也。問序者朱生崇沐紫陽之孫也。予則旧婺令同紫陽之宗也」とあり、強い同族意識の中で朱崇沐の依頼によって序が書かれた。また岡田論文では指摘がないが、陳焯（三山）が成化癸巳に『朱子語類』を校訂するにあたって呉与弼所蔵の本を使ったことを記した「補刊朱子語類大全序」が附してある。この文は京大本や和刻本には登載されず、『朱子入主書』では朱吾弼の文章として整理されているが、それは断定できない。

『朱子語類』の重輯作業は、万曆癸卯三十一（一六〇三）年冬から甲辰三十二年（一六〇四）春にかけて高攀龍所蔵の版本を用いて行われ、婺源で出版された。<sup>63</sup>これが呉養春系統である。万曆甲辰三十二年六月譚昌言が婺源知県として赴任し、彭時・葉向高・朱吾弼・汪応蛟の序を載せた版本が作られ、これが和刻本の底本となる呉勉学系統である。この系統の初刻の序文は朱吾弼（高安）・葉向高（福清）だったことは、和刻本『朱子語類』に附されている汪応蛟「重刻朱子語類大全叙」に「少宰福清葉公既序之、侍御亦自有序矣」とあることから窺える。譚昌言は婺源で出版と教学に尽力し、「重録朱子語類大全序」を記したが、それは後に再度出版された呉養春系統に登載された。呉養春系統は、万曆三十三年頃譚昌言・梁応沢の序文のほか、校閲者に婺源知県金汝諧の名が加えられ、朱吾弼の同僚である王図や楊宏科の序も載せ、万曆三十四年の朱一桂序を登載し、崇禎年間に再刻された。<sup>66</sup>

崇禎本<sup>67</sup>は、陸錫明「補刻朱子語類識語」が巻首にある。次に崇禎癸酉六年（一六三三年）の刊記は、「巡按直隸  
応天等処監察御史遲大成釐正・徽州府知府陸錫明編輯・徽州府推官魯元寵參閱・歙縣知縣葉向標同閱・婺源縣知縣  
劉潛較訂・婺源縣儒學教諭毛湛較訂・婺源縣儒學訓導周延年・董應雷・十四世孫翰林院博士朱邦相同校」とある。  
序は巻頭に葉向高<sup>68</sup>「重鈔朱子語類叙」・朱一桂「重刻朱子語類」・梁應沢「朱子語類序」・王図「重鈔朱子語類叙」・  
楊宏科「朱子語類序」・曹楷「重鈔朱子全書序」・朱吾弼「重刻朱子語類大全序」・譚昌言「重鈔朱子語類大全序」  
と並び、巻末に張元禎「刻朱子語類後序」がある。崇禎本は、初刻から三十年近くも経過し、『朱子語類』「重校語  
類姓氏」にも参加した十四世子孫朱邦相が名を連ねるも、婺源朱家とは関係のない人達の手による補修作業であっ  
た。陸錫明「補刻朱子語類識語」には次のように言う。

語類鏤板、僅三十余年、刷印繁多、遂致漫漶。吾鄉武塘錢少宗伯雅重此書、移東索善本。因取于餘之暇、整襟  
披誦、惜其殘欠不全。適直指東萊遲公按部新安、商及文公遺書。当弘葺補、特加嘆獎。婺邑劉令復収其闕散、  
与毛學博重肆讐較、付諸殺青。于是殘編更新、無魯魚蝕之憾。而劉令庚謀宮室黌宮、貯板珍襲、以垂永久、工  
既竣、爰志。

婺源知県の劉潜が学宮で『朱子語類』の版本を管理しようとしたということは、それまで朱崇沐が創建した蔵書  
楼にあった私物から公の物へと性格が変化したことを意味している。譚昌言の序で「即今高安一倡、而福清西京諸  
鉅公尊明而揚揭之」と述べ、高安すなわち朱吾弼、そして葉向高が朱子學術の志を掲げた事が重要な意味を有して  
いた。万曆三十二年の南京翰林院事西京王図の序には次のようにある。

噫、今之世有能婦命紫陽者、即聖人之徒而已。侍御高安朱公嘗与予嘆息此事、慨然有正人心、明聖学之志、因  
行部得語類、欲広其伝。而紫陽裔孫諸生崇沐者実任之、曰、此吾家学、非子孫誰為倡者。



万曆三十二年当時『朱子語類』は、個人的な熱意がなければ出版も読書もできないような書籍であった。京大本と崇禎本を比較すると、葉向高の序文の書体が異なり、ノ于ノを<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>に変えるなどの差異もある。京大本は内題が「重鈔朱子語類」とあり、校閲者部分だけは罫線がなく、大体半葉十一〜十二行である。しかし、崇禎本は校閲者部分にも罫線があり、大体半葉十四行である。しかし崇禎本は、一部に元の『朱子語類』の板木を用いている。例えば「朱子語類卷第一百四十一」の末尾は十行×二十二字で、「朱子語類卷第二十三」は巻頭の校閲者部文に罫線がなく十二行で、「重鈔朱子語類卷第十七」は板心が他の部分と異なる（付録【対照表A】）。京大本と崇禎本とを比較してみると、両版は同系統にあることが明らかで、崇禎本は補修を加えられ、公的なものとして再刻されたと思われる。

内閣文庫所蔵『朱子語類』（二九八一〇二五二、林羅山・鶯峯手校本）は、譚昌言・金汝諧両名が婺源知県の肩書で校閲者の中に刻され、万曆三十四年秋の朱一桂「重刻朱子語類序」と「補刊朱子語類大全序」が附せられている。林羅山手校本と韓国中央図書館所蔵本『朱子語類』（古一二五二）<sup>69</sup>と比較すると、朱一桂序文以外の序文は一致するので、この二種は同系統であることが分かる。しかし韓国中央図書館所蔵本の先頭は「宗後学」「邑後学」となっている。汪心蛟・汪国楠・彭時の序文を載せる呉勉学系統と崇禎補修本の二種類の版本を参照して作成された。「補刊朱子語類大全序」も恐らくその際に書かれたもので、羅山手沢本と韓国中央図書館所蔵本は、婺源で朱氏が出版したのではなく、後の時代に刷られた金陵刻本系統ではないかと思われる<sup>70</sup>。京大本・崇禎本・和刻本は、みな「宗後学」「邑後学」という語が肩書の前に置かれ、板木の所有者である婺源や朱家が意識された形になっているが、羅山手沢本はこの語が削除されている。つまり婺源や朱家とは関係のないところで統合され出版された可能性が高い。「重校語類姓氏」をみると、そのメンバーは和刻本と若干異なる（付録【対照表B】を参照）。

また崇禎本と羅山手沢本と比較すると、卷二十三の校閲者に譚昌言・金汝諧・吳勉学の名前がなく、半葉無對線十二行で（韓国中央図書館本は十三行で金汝諧の名がない）、崇禎本は統合する前の呉養春系統の形が部分的に残っている。このように、朱吾弼の『朱子語類』は最低でも四回は刷られていたことが窺え、当時において『朱子語類』の定本として文献的な影響力を持っていたと推測できるのである。

万曆乙巳三十三年冬、朱崇沐は馮応京の『朱子録要』を校訂し、朱吾弼と汪国楠はその序文を記した。朱吾弼はその序において次のようにいう。

蓋馮大可先生輯焉、授何君、何君以授朱生崇沐、俾刻以伝：夫今朱氏学浸不講矣：余嘗以語類一書大抵皆格物之論、雖其雜出於門弟子之所記者、不必尽純然、大概嚴於辨、而歸於心精入毫毛、而其大足以談宇宙也。故使崇沐重梓之以示学的然。猶恐其煩而易厭、欲精擇之未能。而馮先生已先有録要、要者不煩、録者不厭、録要出而語類精矣。語類精而格物之旨益顯、斯非入道之指南歟。

この発言は朱吾弼の『朱子語類』に対する考え方を示している。また汪国楠の序にも「紫陽要在伝注、而羽翼伝注在語類」とあるので、『朱子語類』が最初に刊行されたことに関連するだろう。『朱子録要』の馮応京の自序には「辛丑歲予与何充符氏先後下詔獄、暨諸友相与講究天人之際、惟朱子独得其宗、于是取語類大全擇十之二三以际世之」と述べ、馮応京が使用した『朱子語類』は朱吾弼の初刻本である可能性が高い。朱吾弼は万曆四十一年に馮応京の祭文と弔詞<sup>72</sup>も詠んでおり、深い交友関係を裏付けている。

#### 4、『朱子文集』と『朱子奏議』について

『朱子語類』の出版が小宗的ななかで行われていたのに対し、『朱子文集』の編纂は婺源朱氏一族とは趣を異にする。朱吾弼が関わった『朱子文集』は現在、国家図書館・北京大學図書館・天津図書館・ソウル大學奎章閣・前田尊経閣・韓国中央図書館などが所蔵するが、その所蔵機関も多くない。閩本の系統としての評価では「欠字を補った箇所がかなり多いが大多数はいい加減なもので版本上の根拠はない」とされる。これまでその特徴について注目されることはなかったのは、版本系統でいえば嘉靖本を加工しただけで大した異同はないと思われるからである。朱吾弼本『朱子文集』の刊行関係者欄には「後学浙江道監察御史高安朱吾弼重編、礼部儀司制郎婺源汪国楠重校・中書舍人古歙吳養春・吳養京・吳養都・監生吳養沢・汪胤燭、文公裔孫庠生朱崇沐訂梓」とある。肩書に「宗後学」「邑後学」等の語を記さず、朱氏一族とは別のところで制作されたことが窺える。また巻頭に劉曰寧「刻朱文公全集序」と劉洪謨「叙朱子文集大全」が付してあるが、『朱子語類』の序文とは打って変わって、序文中に婺源や朱崇沐のことについて触れられることはない。

一般的に『朱子文集』と呼ばれるものには閩本系と浙本系があり、閩本系の嘉靖本『晦庵先生朱文公文集一百卷目録二卷 統集十一卷 別集十卷』（四部叢刊所収）が一番流通し影響を与えた。<sup>76</sup> 閩本・浙本両系統とも異同はあるが、正集が一百卷であることは同じである。朱吾弼が出版したものは「晦庵先生朱文公文集八十八卷 晦庵先生朱文公續集十一卷 晦庵先生朱文公別集十卷」である。大きく異なるのは正集八十八卷という構成で、統集・別集は変わらない。朱吾弼本『朱子文集』の目録巻十の末尾には「奏劄外刻」と記してあり、嘉靖本の巻十一～二十三ま

での奏劄が削除され、卷十一は嘉靖本卷二十四から始まり、収録される文章には嘉靖本と同様である。

『朱子奏議』は嘉靖本の卷十一―卷二十三に収録される奏啓・封事などを抜き出して単行したものである。万曆三十二年（一六〇四年）夏の葉向高の序文には、「朱生崇沐既刻朱子語類、而余為之序、大較言朱子之學同於孔子、有孔子、不可無朱子也。朱生復衷朱子奏議刻之、而仍屬余序。」とあり、『朱子奏議』には「宗後學監察御史朱吾弼編、邑後學札部郎中汪國楠、邑後學札部郎中江起鵬、浙後學樂城知縣嘉興譚昌言、浙後學婺源知縣平湖金汝諧、後學中書舍人歙邑吳養春同校、宗後學中書舍人休寧朱家用、宗後學婺源教諭新淦朱家楹、十三世孫翰林院博士朱德洪同閱、十三世孫庠生朱崇沐訂梓」とある。筆者が実見した内閣文庫所蔵の朱吾弼『文公先生奏議』（朱子奏議）は二種類あり<sup>77</sup>、両種とも校閲者には譚昌言・金汝諧が含まれ、肩書が「浙後學樂城知縣譚昌言、浙後學婺源知縣平湖金汝諧」となっているから、本書は譚昌言が樂城知縣となり金汝諧が婺源知縣に着任した万曆三十三年（一六〇五年）以降に刊行されたことが分かる。目録内題が「新刻朱子奏議目錄」（史〇五三〇〇七）となっているものと、「重録文公先生奏議目錄」（二八七〇〇四一）があり、前者は卷一以降の卷頭内題は全て「重録文公先生奏議」であるが、最終卷末の最終頁内題が「新刻朱子奏議」となっていて、校閲者も「後學中書舍人歙邑吳養都」の名があり、朱家楹の名がない。後者は序文に「旌邑劉國彰刊」と刻してあるので婺源で刊行されたものだが、前者は恐らく婺源朱氏とは関係のないところで「重録文公先生奏議」の後に改題して印刷されたものであろう。『高安県志』卷二十一芸文には、『朱子奏議』について「家弦戸誦、此刻可謂屋下屋、床上床矣」とあり、後世に実用の書として再刻された可能性がある。また万曆三十七年刊『饒陽県志』<sup>78</sup>には朱吾弼の『朱子文集大全』『朱子語類大全』『朱子考異韓文全集』『朱子奏議』『朱子録要』『朱子年譜』が列せられ、朱吾弼の書籍がこの当時河北に流通していたことがわかる。『朱子奏議』に序文を寄せた葉向高は、思想的には朱子学信奉の立場にあり、「近世の新学を修める

者は好んで朱子を攻撃する。はじめは朱子だけが次第に孔子も批判する<sup>79</sup>と言っている。このような葉向高の朱子学信奉の姿勢と朱崇沐が『朱子奏議』序文を依頼したこととは無関係ではないだろう。葉向高は『朱子奏議』の序では次のように言う。

朱子之地位力量、信不及于孔子也、而其学問之所至、功業之所竟、必足以為天地立心、為生民立命、則吾以為孔子而後、儒者之有实用、未有遠過于朱子者。当孝宗之初立也、朱子上封事至数千言、惟以勤政講学、絶和議復讎耻為說、已切中当日之膏肓。…

近世之士既詆訾宋儒、遂謂用舍無益成敗、而欲束之高閣。至如正心誠意之說、宋人以為世主所厭聞者、今已不復談、及學術壞而君臣之誼衰、其日睽日隔、漸以成極否之勢而不可挽回無惑也。

葉向高は朱熹の「实用」の学問としての側面を非常に強調している。朱熹の封事は明白正大で文意が行き届いて、丁寧に諫めるものであるからこそ、孝宗は七刻まで読み続け、寧宗は朱熹が進講をすれば必ず問い質したと葉向高は主張する。そして孝宗・寧宗の状況と万曆三十二年を比較し、朱熹のものなど役に立たないと高閣に仕舞い込んでしまふ当時の士大夫に対して「學術壞れて君臣の誼衰う」と言う。また『朱子奏議』にも携わった汪国楠は『宋名臣言行録』『皇明名臣言行録新編』なども出版し、自身にも『崇仁堂奏疏』という著作があり、この時期の士人にとって奏議が特別な意味があったことも看過できない。

『朱子語類』の曹楷の序には「今侍御朱君有慨於中、乃采摭考亭遺書語錄若干卷・奏議若干卷、都為全集、梓於金陵、以嘉惠後学。梓成属余序。余謝不敏。夫今之叛考亭者、非以其卑卑無甚高論乎」とあり、遺書と語録・奏議を纏めて『全集』として金陵（南京）で再出版したとある。曹楷は万曆三十六年七月に大理寺左寺丞になっているので、「重録朱子全書序」が書かれたのは万曆三十六年以前のはずである。正確な時期は不明だが、『朱子文集』と

『朱子奏議』は一つに纏めて『朱子全集』として金陵で刊行された。朝鮮仁祖期（一六二三～一六四九年）に出版された『朱子大全』は、劉日寧撰・劉洪謨の序および葉向高「朱子奏議序」を登載しており、朱吾弼『朱子全集』が出版してまもなく朝鮮で、朝鮮本『朱子大全』になった。高麗大学図書館・韓国国会図書館・東京都立中央図書館所蔵の朝鮮本『朱子大全』がそれである。<sup>81</sup>

先述したように『朱子文集』は、劉洪謨や劉日寧の序文があるが、朱吾弼との関わりしか述べられておらず、婺源朱氏のことにも触れていない。劉洪謨や劉日寧は、南昌で朱吾弼と李材の学問を学んだ仲間なので、茶院朱氏を背景とする一族的な繋がりの外側にいる。一方、徽州紫陽書院は府城歙県にあり、新安六邑（歙県・休寧・黟県・績溪・祁門・婺源）では、王陽明が「紫陽書院集序」を記して以来、陽明学の講学活動が盛んに行われ、朱熹と共に陽明も祀られ王学の中心地になっていた。『中国書院志』によれば、万曆三十一年（一六〇三年）の大会以降に王学から朱子学への転向が見られ、天啓元年（一六二一年）に朱子学を信奉する高攀龍を招聘した大会が開かれた。朱吾弼の『朱子文集』重輯作業は、ちょうどこの王学から朱子学への転換期に当たる。

嘉靖十一年（一五三二年）婺源の潘潢が整理した本を用いて、朱吾弼は重輯作業をした。そして彼は序文を劉日寧に依頼した。劉日寧は南昌出身で、字は雲嶠、諡は文簡。<sup>83</sup>朱吾弼にとって劉日寧は行動をともしてきた同郷の同年進士である。劉日寧は高攀龍と交友し、高攀龍は劉日寧に「千古西江為道德忠節之区、今海内所傾心注目者、台丈与南臯先生而已」<sup>84</sup>と鄒元標（南臯）と並べて称賛する。劉日寧は「刻朱文公全集序」に「年友侍御朱諧卿慨然斯道自任、旧刻朱子語類行于世、其後刻全集、首以示余。余曰、美哉。広而核、詳而有次、其朱子之功乎」と言い褒める。そして劉日寧は「奏劄外刻」である本書を「大全」だと言っているから、『朱子奏議』と一纏まりになった金陵で刻した『朱文公全集』を見たのだろう。劉日寧は「刻朱文公全集序」で次のように言う。

諸卿方尽發朱子宝藏、臚列而年志之、挈吾輩以游于青天滄海之間。…明興、哲人繼起、并以朱子為百世宗。其間瓚享譜承母如羅泰和、將順匡救母如王餘姚。夫二子者、其說不相上下、要之皆能達觀於此而曲暢於彼、其於朱子并為功臣。

陽明学の地に生まれた劉曰寧が羅泰和（羅欽順）・王餘姚（王陽明）と言って暗示するのは『朱子晚年定論』である。正徳十三年に王陽明は、朱熹が晩年になって以前の説の誤りを悔い、旧説を改めようとしたが果たせずに終わり、現在通行している説は朱熹が中年未定の段階のものであるとしたのが『朱子晚年定論』である。羅欽順は陽明の『朱子晚年定論』における編年考証に欠陥があると指摘し、陽明が晩年とは何歳なのか基準を設けていない事実を突きつけた。このような考えに対して陳東莞は『学部通弁』を著して朱熹は早年に仏教に染まり、晩年には決別したと唱え、陽明と正反対の順序を主張して「顛倒早晚」と言った。<sup>85</sup> 劉洪謨の「叙朱子文集大全」は王陽明の『朱子晚年定論』の順序に則っている。朱吾弼は朱崇沐らと嘉靖年間に刊行された李黙『紫陽文公先生年譜五卷』を重輯したが、<sup>86</sup> 李黙は陸王学の影響を受け、浙学を批判した淳熙十一年で年譜を区分した。更に佐藤仁氏<sup>87</sup> が指摘するよ

うに、嘉靖本と朱吾弼重輯本には差異があり、紹興十六年の「按語録云熹年十六七時喫了多少辛苦読書」が削除され、淳熙三年婺源帰省に関わる記述が改変されている。まさに「茶院朱氏譜」に関わる場所に手を加えていることから考えると、朱吾弼・朱崇沐らは意図をもって朱熹の思想変遷について陸王学寄りなものに準拠したと考えられる。萬曆乙巳三十三年（一六〇五年）劉洪謨の『朱子文集』「叙朱子文集大全」には次のように言う。

茲刻篇末每多紀年、最不可忽。陳東莞著学部通弁、弁王陽明晚年定論顛倒早晚、殊不足信、全在于此。盖朱子四十以前、如存齋記、答何叔京二書、專說求心。是猶馳心玄妙。未悟天理時語也。四十以後、註太極図説、輯近思錄、漸悔前非。年近六十、註論孟註学庸、益加精進。此時議論加意磨勘、於正誼明道中、猶防計功謀利之

私、而刮之剔之、淘之澄之、務底於平、不敢以己私少戾天理。故年踰七十、病將革矣、猶改大學誠意章、絶無私護意。由此推之、設是年未沒、不知著作若何、和平若何矣。

この劉洪謨の序を読んだ朝鮮の儒者李猷慶（一七一九〜一七九一年）は、「朱子晚年定論弁」（『艮翁先生文集』卷之二十一）を記して批判を加えた。李猷慶は「劉氏之言曰、朱子四十以前馳心玄妙、未悟天理。又以疾革猶改誠意章。為晚年觉悟之証。此与兒童之見何異」といい、朱熹が晩年に悔悟したという考え方自体を子供じみていると蔑み、「余嘗觀陽明伝習録、痛其淫賊、而合得劉氏之論」と批判した。李猷慶にしてみれば、朝鮮本『朱子大全』の巻頭に陽明を是認するような序文があるのが気に食わなかったのかもしれない。それと比較して推測すれば、朱吾弼は序文を劉洪謨に依頼し、劉洪謨の朱熹に対する考え方に疑問を持たなかったのだから、彼同様に『朱子晚年定論』の影響を受けていたと考えられる。李猷慶が批判したように、劉洪謨は陽明学信奉者なのかといえば、実はそうではない。劉洪謨は序に次のように、読書の順序を示す。

朱子文集最豊富、大都明學術、正人心、有功於吾道、与絳章絵句者天壤異論。非留心學問者不讀、非學問精密、得朱子之門而入者不能讀。読之蓋有要焉、要在嚴天理人欲之弁。迹其生平兢兢自衛与其所以攻撃者、不出此意。學者先読答柯国材論天理書、則知天理自然、非高非卑、非近非遠、人心無常、不可自決也。読觀心説読大紀二篇、則知积氏之差、差在惡此天理耳。読鄂州稽古閣記、則知晚世道學俗學之差、差在不講此天理耳。

学ぶものはず「答柯国材論天理書（朱吾弼本卷二十六、嘉靖本卷三十九）を読めと述べ、「觀心説」（朱吾弼本卷五十四、嘉靖本卷六十七）と「読大紀」（朱吾弼本卷、嘉靖本卷七十）を読めば仏教との差異を理解できるといふ。さらに、「鄂州学稽古閣記」（朱吾弼本卷六十七、嘉靖本卷八十）を読めば当世の道學と俗學との差異を理解できるといふ。この他、答陳器之書（卷五十八玉山講義）、答張敬夫中和書、仁説、敬齋箴、答戴少望などの文章を挙



げて、「身に之を体し、心に之を会して」、四書と符合することを確かめよという。劉洪謨は南昌進賢の人で『南昌県志』に伝があるが、彼に関する先行論文は殆どない。彼は仁和知県の時に善政を敷き、工部主事の時に南直隸太平府蕪湖県の地方志『蕪関権誌』を編纂し、蕪湖抽分廠の税制に関して改革するなど民生に尽力した。また彼は呉廷翰の『吉齋漫録』に序文を寄せ、何喬遠の『鏡山全集』にも序文を記し、講学にも力を入れた人である。『江西通志』には「居講学、随時問答、多所啓発、撰大学統衍義十八卷。洪謨恬淡簡重、与顧文憲趙高邑論学、而雅不立幟、所著書五十種、晚作夕惕内照篇」と紹介され、地元江西の鄒元標だけでなく東林の顧憲成・趙南星とも交流があった。また劉洪謨は方大鎮の思想について「不喜晚年定論、深患詆及朱子」といい、方大鎮は王陽明を取るが王龍溪を取らないことを指摘した。劉洪謨については別稿で改めて論じるところとして、劉洪謨の朱熹に対する考え方を知ることができる資料が『朱子同然録』（蓬左文庫所蔵）である。『朱子同然録』は、万曆三十一年（一六〇三年）ちょうど朱吾弼が『朱子語類』の重輯を開始した同時期に、劉洪謨によって編纂された。朱熹が二程語録を読んで体認したところを抜粹し分類・編集したのに倣い、劉洪謨は、周濂溪・張載・二程・朱熹について感じたところを分類し抜粹して編んだものが『同然録』である。『朱子同然録』では、「根宗」に天理・理気・道心・心性、「関鍵」に志学・操心・真知・自得・一本、「磨勘」に講学・知言・知人、「符驗」に志気・人已・交際・人倫居家・出処・窮通・常変・輔君・格君・経世・居官・牧民・教人・文芸・生死という項目を立て朱熹の語を整理している。『朱子同然録』「次同然録序」には、その根宗・関鍵・磨勘・符驗について次のように示す。

蓋同然中根宗也。根宗在我天理内、培志從此堅、学從此固、心靳操而敬；居敬窮理、互発相成、方云一本、方云為己実学、纔離却此性便違、却天理纔違、却天理便都是外附假依。為己為人、之弁可無審、与義利一判、志学天壤（詛）欲為理、奉客為主、皆掀揚飛場馳騫、高明者之過也。磨勘可無精、与稍貳即二條、參即三居、平見

定感遇万遷。：関鍵何居故曰、任重道遠、須弘須毅。又曰、徹上徹下、成始成終、不越此敬、夫合抱豈一日之積哉。：蓋以符驗徵磨勘、以磨勘決関鍵、以関鍵葆根宗、求此同然之己也。不得此己五儒語亦贅言已。

「五儒語」は、周濂溪・張載・二程・朱熹の著作を指す。ここでの磨勘とは、検討するという意味であるが、その講学の分類には朱熹の「読大記」の全文を引いている。「答柯国材」は「根宗」の天理にあり、「答陳器之」は「根宗」の心性にあり、「敬齋箴」は「符驗」の志氣にあり、「答戴少望」は「符驗」の経世にある。このように『朱子同然録』と朱吾弼『朱子文集』の劉洪謨序文に提示された文章を比べてみると一致するものが多く、『朱子同然録』で体認・検討された結果として書かれたものが「叙朱子文集大全」であると考えられるのである。また劉洪謨は『朱子同然録』の「読朱子」で「抑朱子精進此平、豈從一言半餉悟哉。詳味生平語、蓋馳心玄妙、二十余年矣。四十而後嘗覺嘗悔、幸至暮年方喜符合聖賢本意。甲寅一疏自謂、艱難辛苦、持志読書、已有成效」と朱熹の甲寅上奏を引き、朱熹が晩年まで学問に苦しみ四十以後に悟ったと述べている。これらのことから、劉洪謨は王陽明の『朱子晩年定論』の影響を受けてはいるが、王龍溪や王心齋等の陽明後学の説を採用しておらず、どちらかといえば朱子学寄りの思想を持った人であった。

万曆丙午三十四年（一六〇六年）『朱子文集』重編の同時期に、董崇相（南京戸部陝西清史司主事）の家藏本に依つて朱吾弼は『朱子經濟文衡類編』を出版した。それは同僚の御史である孫居相（一五六〇～一六三四年、字伯輔、字洪陽、山西沁水縣人）と李雲鵠の協力を得て刊行した。朱吾弼はその『朱子經濟文衡類編』の序文で「紫陽遺文亦多在閩、閩董公崇相乃出家藏善本以授余。余同臺孫公、李公方砥柱澄清、期在共濟、遂協意鉅梓。朱生崇沐慨然身任、力闡先伝。因属王生、吳生專力校讎、刻成徵余序。夫紫陽之文以六経為臚府、豈尽文衡一編。」といい、やはり汪国楠と呉養春が校讎に当たっている。朱吾弼は序文で「夫論世務則世務耳、何至合理性於簿書名例之細而以

為經濟耶。理性、吾本源也。本源理會、彼于宇宙內事、猶以高下制水、燥濕制火、按方察脈、神明之妙自行、固非棄倫絕學之虛而誨世取寵之陋矣。∴經學經濟、夫豈二体」と述べ、「經學」と「經濟」（經世濟民）とは一体であると考えていた。学問の社会的な実践について朱吾弼は董崇相と語ったことがあった。董崇相「重刻經濟文衡跋」には次のように言う。

侍御高安朱公大振紫陽學、悉刻其所為書行之。聞予有此喜曰、語類繁而錄要簡、此為善矣。且可資以經世。前人用心不淺、非我誰能章顯者。遂屬朱生取毀淫書板、與之令梓焉、曰、吾以正易邪、使天下曉然。知經綸宇宙者、在此不在彼。董生作而嘉嘆曰、侍御今世招搖自命者、率以不講學不足經世、而詆毀朱子如讎、率取一種善逃遁、無檢押之說、托之於性命、至參其事實∴

董崇相の發言から朱吾弼は朱熹の遺書を出版することで世の中を変えようとしたことがわかる。「以不講學不足經世」と言うのは、張居正が書院を廃止し講學に打撃を加えて以降、講學が悪者扱いをされるようになってからの事を指すのだろう。朱吾弼は万曆三十四年（一六〇六年）に丘濬の『朱子學的』を刊行し、その朱吾弼の序には「燔之曾孫諸生崇沐、以鏡先生語類、近思錄及全集、楚辭注、家礼、韓文考異、讀書之暇、旁及於采先生言、若經濟文衡者而并鏡。是集余因以得竊觀焉」とあり、朱吾弼は『經濟文衡』より先に『韓文考異』を刊行していた。朱吾弼はその『韓文考異』序文に「朱生崇沐尽刻紫陽遺集、可謂有功斯文。至是以韓文考異問序余、夫何以文為也。今天下浸播於仏氏、而弁視紫陽、則詆仏一疏、竊願レ幽主之耳」と言う。つまり、朱吾弼が目の敵にしていたものとは、仏教の弊害であった。汪国楠はのちに南昌知府となるが、「与汪斗崙南昌」には「敝郷學者多主頓悟、未免推禪附儒、援儒入禪、反以博文約礼為粗、欲超頓而上之、有是理乎<sup>89</sup>」とあり、朱吾弼は故郷南昌の學風を批判している。『密林漫稿』卷二「滁陽正學書院記」には次のように言う。

正学書院即平虚書院、而予改題者。…予慨今世道壞於人心、人心壞於學術、學術壞於崇異詭正、非惟佛附儒則援儒入佛、甚而操戈儒室、左袒佛門、不然者、謬称三教先生、熒惑視聽、雖高明先詰、且以無善無惡之說、誤人入不思善不思惡之宗、如病在膏肓、靡可救藥。…

朱吾弼が具体的に何に対して発憤したのかといえ、「無善無惡之說」によつて「人を誤らせて不思善不思惡の宗に入らしむ」とあるので、陽明後学の弊害であろう。黄宗羲は「姚江之学、惟江右得其伝、東廓・念庵・両峯・双江其選也」と言い、江右の南昌はその中心地であつた。江西は忠孝を以て崇道を説いた浄明道の土地でもあつた。朱吾弼は朱熹を表彰することが士人の學術や人心を救ふことになると考えていた。鄒元標が三教一致の思想を持ち、『性命圭旨』に序文を寄せ、仁文書院で救済活動を行ったのと比較すると、朱吾弼の立ち位置がより明確になる。そして發源闕里、即ち發源朱氏を拠点に朱子文献を刊行することが學術を恢復させる一環だと考えていたようだ。彼が別の書状で「近慨世道壞於人心、人心壞於學術、學術壞於背正崇邪。居留台時、商之一二同志、表章朱子、為挽回計、重梓其書、建藏書樓於發源闕里、頗有津津婦正者已十數種<sup>91</sup>」と回想する。また彼は朱国禎（一五五七年一六三二年、字は文寧、号は平涵）に宛てた書簡に「朱子新刻一部附覽<sup>92</sup>」と述べ進呈していることから、自身が出版した朱子文献を普及させようとしたことが窺える。

## 10、朱子附覽

宋良翰は『密林漫稿』の序文で次のように述べている。

建崇本堂以尊祖宗、立家法以訓族党、繹詩礼以教子孫。平居與人言、必依於孝弟忠信、郷之人薰其徳、而善良

化之数拾年、無以訟入公庭者。太宰蔡公卒、厥嗣以憂遘疾、度不起。謂其私親曰、家權厄運、少婦孀居、諸孤方襁褓、環向窺伺者衆、能為我立孤者、獨吉水鄒公与高安朱公耳。

地元江西では鄒元標（吉水）と朱吾弼（高安）が教化に努めた。朱吾弼は、講学が悪いのではなく講学が現実社会にコミットしないことが問題だと考え、朱子学を批判するものが無用の長物として「欲束之高閣」とする姿勢に朱吾弼は異を唱えた。

婺源の紫陽書院は、嘉靖四十一年（一五六二）知県張楨が講学を開始し、毎季一会講を行うようになり、鄒守益は会約を定めた。その後、張居正の書院肅清に遭い、天啓期に邑人余懋衡、汪応蛟、游漢龍、潘之祥、汪秉元、朱德洪・知県盧化鰲などが集まり紫陽書院を再興し活動を推進したと一般的には理解されているが、それ以前に先駆的活動をしたのが、朱吾弼たちだったのである。

『徽州府志』には「天下書院最盛者無過東林、江右、閩中、徽州」とあり、徽州商人（徽商）は族学を設立し、宗族子弟のために学校教育を行った。徽州宗族研究では、章毅<sup>93</sup>氏をはじめ、唐力行・王振忠・趙富華・呉長庚<sup>94</sup>・ト永堅・張愛華<sup>95</sup>氏などの優れた先行研究がある。これらの研究は族譜の重修を中心に宗族の活動を分析するものである。万曆四十七年に朱德洪・朱邦相は『重修朱氏統宗譜』を編纂、さらに天啓四年には『徽婺紫陽朱氏重修統譜』を作成、崇禎四年には『婺源茶院朱氏宗譜八卷』（上海図書館所蔵）を出版した。崇禎六年に第十四世子孫・朱邦相は『朱氏統宗譜』を編集している。またト永堅『婺源的宗族・経済与民俗』に指摘があるように、『朱氏正宗世譜』（婺源闕里朱氏宗譜）はその系統を受け継いだもので、朱吾弼・朱崇沐の活動期と族譜修補は重なっている。また白井佐知子『徽州商人の研究』では、徽商が宗法を重視し祠堂を造り、族譜を編集することは、彼らの商売と基盤を強固にする手段であって、祠堂の管理や族譜の編輯を通して宗族間の血縁帰属意識を高め、地域のネットワーク

の連携・結束をより確実なものへとしていたことを指摘する。<sup>97</sup>

朱吾弼・朱崇沐の朱子遺書出版計画は、徽商が編纂した坊刻本『直指算法統宗』（休寧・程大位）・『士商類要』（新安・程春宇）などの商業書籍とは性質が全く異なる。例えば、『朱子語類』の校閲参加者をみるとわかるように、氏族内でのテキストとしての色合いが濃く、朱氏以外の呉養春一族が朱吾弼の出版活動に当初から参画しているのも、地域に根ざす宗族意識に裏づけられている。

そして『朱子語類』の版本を整理することで、彼らの活動の影響が如何なるものであったのかを窺うことができ。京大本と羅山本の「重校語類姓氏」を比較すると、その参加者の差異が明らかである。（附録【対照表B】を参照）韓国中央図書館所蔵本・和刻本・羅山本には、婺源の沱川余氏（余懋衡・余懋学・余懋琳・余紹祿）の名もあり、万曆三十二年の作業以後に、地域の講学活動として参加者が増加していったことが分かる。また『韓文校異』「閲訂姓氏」を見ると、婺源沱川の余紹祿のほか、朱一桂の親族である浮梁朱氏も参加している（附録【対象表C】を参照）。朱吾弼らの出版活動のあと、万曆四十五年馮少墟が徽州で講学したときにも「今歲徽州大会、汪登源・余少原諸公以書托貴、門人江汝修跋涉數千里、見召且約會畢。…」とある。余懋衡（余少原）は『重校朱子易学啓蒙』を重輯したが、校訂者は呉養春・王正巳・江応貢、訂梓者は文公裔孫朱邦藻（朱崇沐の息子）とあり、南昌の熊惠書が出版した。王正巳（用修）は朱吾弼の出版に携わった歙県生員であるから、本書は朱崇沐の出版活動の後に出版されたことが明白で、朱吾弼によって朱子文献出版の契機が作られ、その後も引き継がれたことが分かる。このあと呉養春は、世界で最初の期刊性の類書『朱翼』を出版した。万曆四十四年「新安江旭奇舜升輔編輯、呉養春百昌甫校閲、江応貢君常甫参訂」とあり、江旭奇は朱吾弼『朱子語類』の校閲者江起鵬の姪である。『朱翼』は朱熹の言葉を新たな概念の語句に分類して作られた類書であるが、これを編纂するための朱子文献を朱吾弼が用意

したと言えよう。こうして朱吾弼によって出版された朱子文献は清朝に再刻されたのみならず、朝鮮や日本に齎され朱子学の基本的文献として受容されていったのである。

以上、朱吾弼『密林漫稿』を通して、朱吾弼の交友関係や万曆三十二年頃朱熹の末裔たちが携わった朱子文献の出版活動の様相を解明してきた。現在万曆本として流布する和刻本『朱子語類』および万曆『朱子語類』の諸版本を比較し、彼らが私的に出版したものが次第に公の出版物へと移行していき、何度も刊行されたことを明らかにした。朱氏一族と徽商がその背景に関わっていることも、本稿で初めて指摘することである。また『朱子文集』と『朱子奏議』をまとめた「全集」が南京で出版され、すぐに朝鮮本『朱子大全』として受容されるなど、朱吾弼が携わった朱子遺書は中国国内のみならず、周辺諸国の朱子学理解にも影響を与えていたことも指摘した。

明代において朱熹の末裔が出版に関わった朱子文献は、朱熹八世孫朱境刊の『年譜』など多くはない。天順四年刊の胡緝『朱子大全』をはじめ、朱子遺書の代表と言うべき『朱子語類』も江西藩司の出版だし、嘉靖刊『朱子文集』も潘潢が整理したものである。そのように考えると、万曆年間に婺源朱氏末裔が朱子遺書の出版の主体であったことは画期的なことであり、朱吾弼が刊行した朱子文献は、朱熹末裔が出版したものとして、影響力があったと考えられる。清代雍正年間には、福建建安十六世嫡孫朱玉が『朱子文集大全類編』を刊行するが、その前段階として朱吾弼が果たした役割は決して小さくないことも立証したといえよう。しかしながら、朱吾弼の思想的方面については、資料的にまだ困難なところもあり、更に検討すべきところも多いので、今後の課題としたい。

【对照表 A】

『重脩朱子語類』卷首  
京大中文文・C/11p/6-22  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
浙後学樂城知縣嘉興譚昌言  
宗後学婺源教諭新淦朱家楙  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
宗後学庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

和刻本『朱子語類』  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
浙後学樂城知縣嘉興譚昌言  
宗後学婺源教諭新淦朱家楙  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
宗後学庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

『重脩朱子語類』卷目  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
後学礼部郎中婺源汪國楙  
礼部主事婺源江起鳳  
婺源知縣嘉興譚昌言  
婺源知縣嘉興譚昌言  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

『重脩朱子語類』卷二十三  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
宗後学婺源教諭新淦朱家楙  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
宗後学庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

麗山本『重脩朱子語類』  
内閣文庫 289-0252  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
後学礼部郎中婺源汪國楙  
礼部主事婺源江起鳳  
婺源知縣嘉興譚昌言  
婺源知縣嘉興譚昌言  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

『重脩朱子語類』卷二十三  
内閣文庫 289-0252  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
後学礼部郎中婺源汪國楙  
礼部主事婺源江起鳳  
婺源知縣嘉興譚昌言  
婺源知縣嘉興譚昌言  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

『重脩朱子語類』卷目  
韓國中央圖書館1252-12-34  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
浙後学樂城知縣嘉興譚昌言  
宗後学婺源教諭新淦朱家楙  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

『重脩朱子語類』卷二十三  
韓國中央圖書館1252-12-34  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
浙後学樂城知縣嘉興譚昌言  
宗後学婺源教諭新淦朱家楙  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

【对照表 C】

新刻朱子叢註  
内閣文庫 史53-7  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
浙後学樂城知縣嘉興譚昌言  
宗後学婺源教諭新淦朱家楙  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

重脩文公先生叢註  
内閣文庫 287-0041  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
色後学礼部郎中汪國楙  
色後学礼部郎中汪國楙  
浙後学樂城知縣嘉興譚昌言  
宗後学婺源教諭新淦朱家楙  
宗後学中書舍人休寧朱家用  
敬後学中書舍人吳養春  
敬後学光祿署丞吳勉学  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
庠生高安朱家紀  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

『紫陽文公先生年譜』  
東大東文1名人-9  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
後学礼部郎中婺源汪國楙  
後学婺源知縣嘉興譚昌言  
後学中書舍人古歙吳養春同校  
後学婺源教諭新淦朱家楙  
十三世孫翰林院博士朱德洪同閱  
十三世孫庠生朱崇沐校梓

『重脩朱子学的』  
内閣文庫 子002-0020  
後学宗高安朱吾弼  
後学婺源汪國楙  
後学当湖金汝諧  
古真真學行  
後学歙色吳養春  
後学婺源江应龍編  
後学婺源汪鳳忠  
後学婺源汪鳳昌全校  
文公十三世孫朱崇沐校梓

朱文公校昌黎先生文集(天德堂)  
内閣文庫 314-O212  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
礼部儀制司郎中婺源汪國楙  
松江府通判新淦朱家楙  
婺源知縣長水譚昌言  
教諭武昌任家相  
訓導姑蘇徐有德  
金陵劉遵喬全校  
遺貢吳丞長汀馬孟復重閱  
文公孫庠生朱崇沐校梓

朱文公校昌黎先生文集  
國家圖書 9708  
宗後学監察御史高安朱吾弼編  
礼部儀制司郎中婺源汪國楙  
松江府通判新淦朱家楙  
婺源知縣長水譚昌言  
婺源知縣嘉興譚昌言  
教諭武昌任家相  
中書舍人吳養春全校  
中書舍人吳養春全校  
遺貢吳丞長汀馬孟復重閱  
文公孫庠生朱崇沐校梓

『登詩集註』  
韓國國會圖書館  
後学監察御史高安朱吾弼編  
禮部郎中婺源汪國楙  
婺源知縣嘉興譚昌言  
婺源教諭新淦朱家楙  
光祿署丞歙色吳勉學同校  
教諭廬生王正己  
文公孫庠生朱崇沐校梓

『簡庵先生朱文公文集』  
奎章閣 3074  
後学浙江道監察御史高安朱吾弼編  
礼部儀制司郎中婺源汪國楙重校  
中書舍人古歙吳養春  
吳養春  
吳養都  
監生吳養淳  
汪鳳淵  
文公孫庠生朱崇沐校梓





- 1 『朱子全書』、上海古籍出版社、校点説明、三頁。
- 2 『朝鮮古写徽州本朱子語類・景日本九州大学図書館蔵本』解説。
- 3 石立善「朝鮮古写徽州本『朱子語類』について―兼ねて語類体の形成を論ずる」『日本中国学会報』第六十集、二〇〇八年。
- 4 徐時儀「朝鮮古写徽州本《朱子語類》考」『古籍整理研究學刊』二〇一二年五月第三期
- 5 寛文八年刊本と寛政三年刊本があるが、兩種とも朱吾弼『朱子語類』を底本とする。
- 6 岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」(『和刻本朱子語類大全』中文出版社、一八頁)。
- 7 「岩手産業会館所蔵」とあるが現存は確認できず、その複写本のみ九州大学附属図書館が所蔵する。
- 8 『明史』卷二百一十八、および康熙十年序本『高安県志』に伝がある。小野和子『明季党社考』(同朋舎出版)卷末「東林党関係者一覽」の三十三頁を参照。
- 9 『達観楼集』卷十七「南京太僕卿朱公密所伝」。
- 10 『達観楼集』卷二十四「祭太僕卿朱密所諱吾弼先生」。
- 11 『密林漫稿』卷三「外祖孝靖先生梅臯黄公墓誌銘」。
- 12 『密林漫稿』卷九「又答具師每民部」。
- 13 同郷の陳邦瞻の『陳氏荷華山房詩稿』には、「寿朱諧卿廷尉六十長句」など交往詩詞を多数収録している。
- 14 『密林漫稿』卷九「与聶孝廉猷廷」に「昔鄒南臯公初会池陽、囑不佞以更莫回頭書紳」とある。三浦秀一「万曆王学者鄒元標の前半生とその思想」(『集刊東洋学』一二二号、二〇二〇年)によれば、万曆十八年に鄒元標は池陽の陽明先生祠を訪れており、この時に面会したと思われる。
- 15 『密林漫稿』卷九「与顧涇陽文」。
- 16 杜雲虹「稀見明万曆二十八年刻本《余学士集》談概」『山東図書館學刊』(二〇一五年)を参照。
- 17 『密林漫稿』卷五「祭朱汝潔文」。

- 18 『婺源県志』 卷二十一 義行「母方娠歴数日不下、父危之、欲去子存母。夜夢文衣冠儼然呼其父、曰、汝將誕子、吾竊自喜。他日昌吾道者在是。果誕、乳名文喜、從夢徵也。」
- 19 『婺源県志』 卷十四「藏書樓記」を参照。朱崇沐は朱熹の「藏書閣記」を意識していた。徐学林『徽州文化全書・徽州刻書』安徽人民出版社、二〇〇五年、七九〜八〇頁。
- 20 『浙江通志』によれば、婺源大畝人。万曆二十三年進士。蘭溪知県となったあと、南京兵部主事、南京礼部儀制司郎中に調せられ、真定郡守に遷る。その後、南昌知府となり、万曆四十年（一六一六年）江西按察司副使にのぼり、翌年江西按察司副使となる。著作に「理学精義解」、「崇仁堂奏疏」、「偶吟集」がある。
- 21 『新安文獻志』 卷十八。
- 22 趙華富「朱熹与婺源茶院朱氏宗族」『安徽大学学报（哲学社会科学版）』、二〇一〇年第三四卷第四期、「新安月潭朱氏族譜卷一非朱熹佚文考」与『朱子全集』輯録者商榷」『安徽大学学报（哲学社会科学版）』二〇〇七年、第三一卷第二期。
- 23 卜永堅「元明清時期婺源朱熹崇拜的建構」、「徽学」第七卷、二〇一二年、および『婺源的宗族、经济与民俗』（上册）第一章、八頁。
- 24 『密林漫稿』 卷六「世譜総図説」。この文章の他にも「譜後自述」では万曆三十三年に三十四歳で「高安社山朱氏世譜」を編集したことが述べられている。
- 25 『鐫蒼霞草』 卷五（趙邦柱万曆三十四年刻本）「朱氏小宗譜序」に「朱氏于江南為望族、其世則自唐而宋而明、其地則自吳郡而新安、而浮梁而豊城、高安在豊城者為穆湖、為燕坑、在高安者為社山。豊城社山之分、迄今侍御公為世二十有二、為族属者指難数計、譜之修為元至正燕坑、続于国初穆湖、社山闕然者四百年矣、侍御公、社山産也」とある。
- 26 『密林漫稿』 卷一「社山朱氏東里齋小宗引」。
- 27 『合併黄離草』 卷十八「高安朱氏族譜序」に「夢仙夢龍夢炎、夢龍之後、有大学士公善、皆居豊城。夢炎居瑞州高安、于建中靖国間以避難徒以忠義顯、今高安之有朱所由始也。…而高安譜始于元至正戊子重修、于永楽四年而再（食+希）

于今文献固待人矣」とある。

28 『密林漫稿』 卷二、「社山朱氏祀堂記」。

29 『密林漫稿』 卷四「家紀行述」、同卷五「祭児家紀発引文」、「告亡児家紀文」。

30 前掲、小野和子『明季党社考』、一三九頁。

31 『明儒学案』 卷六十 東林学案 三。

32 『泉湖山房稿』 卷十三「伝是堂隸毘陵郡治歐陽使君、嘗復故龍城書院遺趾、即其地建先賢祠、其郷之先哲延陵季子而下六十五人、以示風勸、祠左右翼各為齋舍、以居諸生之講業者中為堂、三楹堂成、朱侍御公以闕汎至見而題之爰命、今名蓋取韓子贈文暢序中語也。：侍御名吾弼、字某、江西高安人。與使君同年進士、嘗因使君之請、発明伝是之旨、其具語在題詞中茲不著」。

33 『神宗実録』 万曆三十一年十二月壬午朔条。

34 『定陵註略』 卷三「乙巳大計」に「南北省相顧莫敢言、及劉公（元珍）抗章論劾、龐（時雍）朱（吾弼）諸公繼之」とある。

35 小野和子『明季党社考—東林党と復社—』 同朋社出版、二二六頁。

36 『密林漫稿』 卷七「答馮婺源講学会」。

37 『密林漫稿』 卷九「答馮婺源」。

38 『婺源県志』 卷十五、名賢の条。

39 『密林漫稿』 卷九「答余瑤圃掌科」。

40 『高攀龍全集』（下冊）、鳳凰出版社、一一〇—一三頁。

41 陳邦瞻の事跡については、鄒維璉『達觀樓集』 卷十七「明兵部左侍郎贈兵部尚書高安陳公匡左伝」を参照した。

42 『密林漫稿』 卷五「祭文公朱夫子文」。

43 『鐫蒼霞草』 卷六（趙邦柱万曆三十四年刻本）「重刻通鑑綱目序」。

44 『婺源県志』 卷十二「茂才崇沐、公之十三世孫也。深慮散逸致学脈湮蕪乃尽搜遺書為部若干卷若干、將剖劂之。高義儒紳聞而損貲以梓、建崇樓以貯厥地」。

45 前掲、三浦秀一「万曆の王学者鄒元標の前半生とその思想」、『集刊東洋学』一二二、二〇二〇年。

46 呂妙芬「晚明江右陽明学者的地域認同與學風格」、『台大文史哲學報』二〇〇二年。

47 『密林漫稿』 卷三「蔡宮保見麓先生墓表」 卷五「祭冢宰蔡見翁文」。

48 徐学林『徽州文化全書・徽州刻書』、安徽人民出版社、二〇〇五年、七〇頁参照。

49 『徽州府志』 卷十之二選萃志には「吳養春、作崇文書院、刻朱紫陽全書十六種」とある。

50 『密林漫稿』 卷九「答王用修正巳」「王用修賢者世俗安能已春秋責備乎、不受其精未足明廉孤寡苦累、實負汝潔文公之学、仁讓之学也、康濟之学也。以藏書物了梓書事、直転移間、今孤寡之困自為困耳。汝潔非斗齒貸金倡鼓舞、百昌諸公必不能成此眩古之業、兩浙所収不貲、真定所収不貲。汝潔止從此結局不失、為文公肖孫、乃初以義学終以利迷、綱目蘇刻精美、愚力止之、令市数部藏之書樓。」

51 徐学林『徽州文化全書・徽州刻書』、安徽人民出版社、二〇〇五年、七九頁および八七頁。

52 張海鵬・王廷元『徽商研究』 安徽人民出版社、二〇一〇年、五二九〜五三〇頁。

53 王興亮「明末徽州大獄与党争」、『江蘇科技大学学报(社会科学版)』、二〇一五年。

54 『密林漫稿』 卷九「答吳百昌中翰」。

55 吳勉学は師古齋という室号で知られる徽州随一の刻書家である。特に医学書を大量に刻書したことで知られ、『訥庵偶録』には「歙県吳勉学、夢為冥司所録、叩頭求生。旁有一判官稟曰、吳生陽録未盡。吳連叩頭曰、願作好事。冥司曰、汝作何好事。吳曰、吾觀医集率多訛舛、当為訂正而重梓之。冥司曰、刻幾何書。吳曰、三万。冥司可而釈之。吳夢醒、広作医書、因而獲利、乃搜古今典籍、并而梓之、刻梓費幾十万。」とある。(『徽商研究』五一九頁を参照。)

56 「重録朱子語類叙」という内題を含む八葉が錯簡している。

57 『朱子語類』の序跋類を収録した『朱子全書』第十八冊附録二には朱吾弼の文章として「補刊朱子語類大全序」が収載されているが、内閣文庫本には筆者の名がない。

58 岡田氏が指摘するように、内閣文庫本の張元禎後序は、京大本「朱子語類大全後序」の全五葉の最後の一葉部分のみ載せている。張元禎『張東白文集』には「重刻朱子語類大全後序」があり対照したところ、朱吾弼が使用した重刻ではないものである。

59 岡田武彦「朱子語類の成立とその版本」（『和刻本朱子語類大全』中文出版社、所収）

60 『婺源県志』によれば、万曆二十年から二十七年の間に婺源知県の任にあった。

61 『朱子全書』第十八冊、四三七二頁では朱吾弼の文章としている。なおこの文章は京大本には収録されていない。

62 葉向高の序文には「侍御高安朱公、每與余言輒慨然發憤、思欲広朱子之遺書、以行於世、会行海上、而錫山高君雲從、出其所藏朱子語類一百四十卷、相与説之而喜、以属朱之裔孫諸生崇沐者、校而梓焉」とある。

63 譚昌言「重鈔朱子語類大全序」に「万曆甲辰婺邑重刻朱子語類成茲刻也。侍御高安朱公以正学明道為任、從錫山名家、訪得江右善本、授朱裔諸生崇沐刻之、命学諭朱君家林校焉、卯冬経始辰之春、遂成書矣。余令是邑、以辰歲元朔入境、竊意仕学之旨、而念婺固文献里也」とある。

64 『婺源県志』によれば、譚昌言は万曆三十二年に常熟から婺源知県になり、三十三年に喪の為に辞めてのちに樂城知県になった。ちなみに錢謙益が譚昌言の墓誌銘「山東青登萊海防督餉布政使司右參政贈太僕寺卿譚公墓誌銘」を書いて「外艱服闋、補真定樂城縣、升南京兵部職方司主事」とある。『静志居詩話』卷十六に「移婺源、尽鐫徽国文公遺書、儲之高閣、課士子誦習」とある。

65 『徽州府志』によれば、万曆三十一年から三十三年末まで知府の任にあった。序文には「歛民黄尚清刻」と刻者名が記してある。

66 金汝諧は万曆三十三年から三十七年まで婺源知県を勤めた。

- 67 九州大学附属図書館所蔵の岩手産業会館所蔵複製本を参照した。「奥御蔵書」の印があり、陸奥国盛岡藩の奥御蔵にかか  
るものである。
- 68 梁応沢の部分と錯簡がある。
- 69 巻頭の序文の順は、梁応沢・葉向高・王国・楊宏科・曹楷・朱吾弼・譚昌言・汪応蛟・汪国楠・彭時・補刊朱子語類大  
全序である。
- 70 筆者は未見であるが、故宮博物院文献館所蔵の朱吾弼が出版した『朱子語類』は金陵刊本となっていて書式は同様である。  
なお羅山手沢本・韓国中央図書館所蔵本には梁応沢序文に「歙民黃尚清刻」とあり、同版であることがわかる。しかし  
ながら、『朱子語類』本文の校閲者の箇所は同一ではない。付録の【対照表A】を参照。
- 71 馮応京（一五五五年～一六〇六年、字可大、號慕岡、安徽泗州人）は、万曆二十九年（一六〇一年）に何棟如とともに  
逮捕され、同三十二年に釈放、その翌年に病で亡くなった。
- 72 『密林漫稿』巻五「過盱眙祭馮慕岡文」、『密林漫稿』卷十「吊馮慕岡」。
- 73 韓国中央図書館所蔵『晦庵先生朱文公文集』（田>古五七九―四三）は、序文はなく現存するのも五冊のみであるが、朱  
吾弼『朱子文集』である。
- 74 『中国古籍善本目録』によれば、中山大学図書館に崇禎七年の李寅賓重修本があるが、筆者は未見である。李寅賓は『婺  
源県志』によれば崇禎八年の婺源知県である。
- 75 尹波・郭斉「朱熹集版本考略」（『国際文化』一号、大平桂一訳、二〇〇〇年）。
- 76 尹波・郭斉「朱熹集版本考略」（『国際文化』一号、大平桂一訳、二〇〇〇年）。
- 77 『重録文公先生奏議』は東京大学東洋文化研究所・前田尊経閣・国家図書館も所蔵する。内閣文庫所蔵本（二八七・〇〇  
四一）・国家図書館所蔵本には「旌邑劉国彰刊」とある。
- 78 『饒陽県統志』（万曆三十七年）書籍の条。

79 朱吾弼『朱子語類』序。

80 『明神宗顯皇帝實錄』卷之四百四十八、万曆三十六年七月の条に「壬辰升浙江道監察御史曹楷為大理寺左寺丞」とある。

81 『朱子大全』高麗大学校図書館『朱子大全』(D1-1288-1-61) 韓国国会図書館所蔵『朱子大全』(古 18123x548x)、東京都立中央図書館所蔵『朱子大全』(特八〇六二)。藤本幸夫『日本現存朝鮮本研究』(京都大学学術出版会、二〇〇六年) 五五八頁参照。

82 鄧洪波『中国書院志』新華書店、二〇〇四年、三八五頁。

83 『江西通志』卷六十九、人物四、劉日寧の条に依る。『明史』列伝(第一百四)では、「字は幼安」とある。『明史』によれば、万曆三十九年の辛亥京察に関連して万曆四十年(一六一二年)に死去した。

84 『高攀龍全集』(上冊、高子遺書卷八上)「与劉雲嶠 一」、四四〇頁、鳳凰出版社。また万曆三十三年(一六〇五年)、劉日寧が国子監祭酒のときに朱国禎・焦竑らと編纂した唐順之の『荊川先生右編』を贈られ、高攀龍は彼に感謝の書簡を認めており、親しい関係が窺える(『高攀龍全集』(中冊、高子未刻稿)、「与与劉雲嶠年兄」、一一一〇頁、鳳凰出版社)。

85 中純夫「中国と朝鮮における朱熹に関する考証的研究」『日本儒教学会報』第二号、二〇一八年。

86 筆者が実見したのは、東京大学東洋文化研究所蔵本(明李黙、朱河重訂、朱吾弼輯)である。朱吾弼重輯本は巻頭に魏了翁「朱文公先生年譜序」・李黙「重刊紫陽文公先生年譜序」・戴銑「朱子実紀序」・朱家楨「文公先生年譜序」、巻末に十一世孫の朱凌「紫陽文公年譜後序」があり、その末尾に「十三世孫朱崇沐重梓」と刻してある。尹波「明刊朱熹年譜述評」(『求索』二〇〇九年十一月)が整理するのによれば、明代には朱熹の『年譜』が少なくとも十五種出版された。

87 佐藤仁「李黙本朱子年譜について」『日本中国学会報』第十八号、一九六六年。

88 方昌翰輯「桐城方氏七代遺書」(光緒十四年刊本)所収、劉洪謨「読桐川方魯岳先生論学序」。『第五屆海峽兩岸青年易学論文発表会会談論文集』(二〇一二年) 七一頁を参照。

89 『密林漫稿』卷九「与汪斗崙南昌」。



- 90 『明儒學案』 卷十六「江右王門學案 前言」。
- 91 『密林漫稿』 卷九「答侯道華広州」。
- 92 『密林漫稿』 卷八「寄朱平涵年兄」。
- 93 章毅『理学、士紳和宗族：宋明時期徽州的文化與社会』香港中文大学出版社、二〇一三年。
- 94 呉長庚『婺源朱氏家譜提要』『上饒師專學報』一九九四年、第三期。
- 95 張愛華『文化軟權力視野下的家譜研究：以明清安徽涇縣朱氏系列家譜為樣本』、天津人民出版社、二〇二〇年。
- 96 卜永堅『婺源的宗族・經濟与民俗』、復旦大学出版社、二〇一三年、八頁。
- 97 臼井佐知子『徽州商人の研究』（汲古書院、二〇〇五年）、九九頁。
- 98 尹波「清代朱熹年譜彙考」（『歴史文献学研究』第三七号、二〇一六年）、および方彦寿『朱熹学派与閩台書院刻書の伝承和發展』（福建教育出版社、二〇一五年）所収「朱玉与《朱子文集大全類編》」を参照。